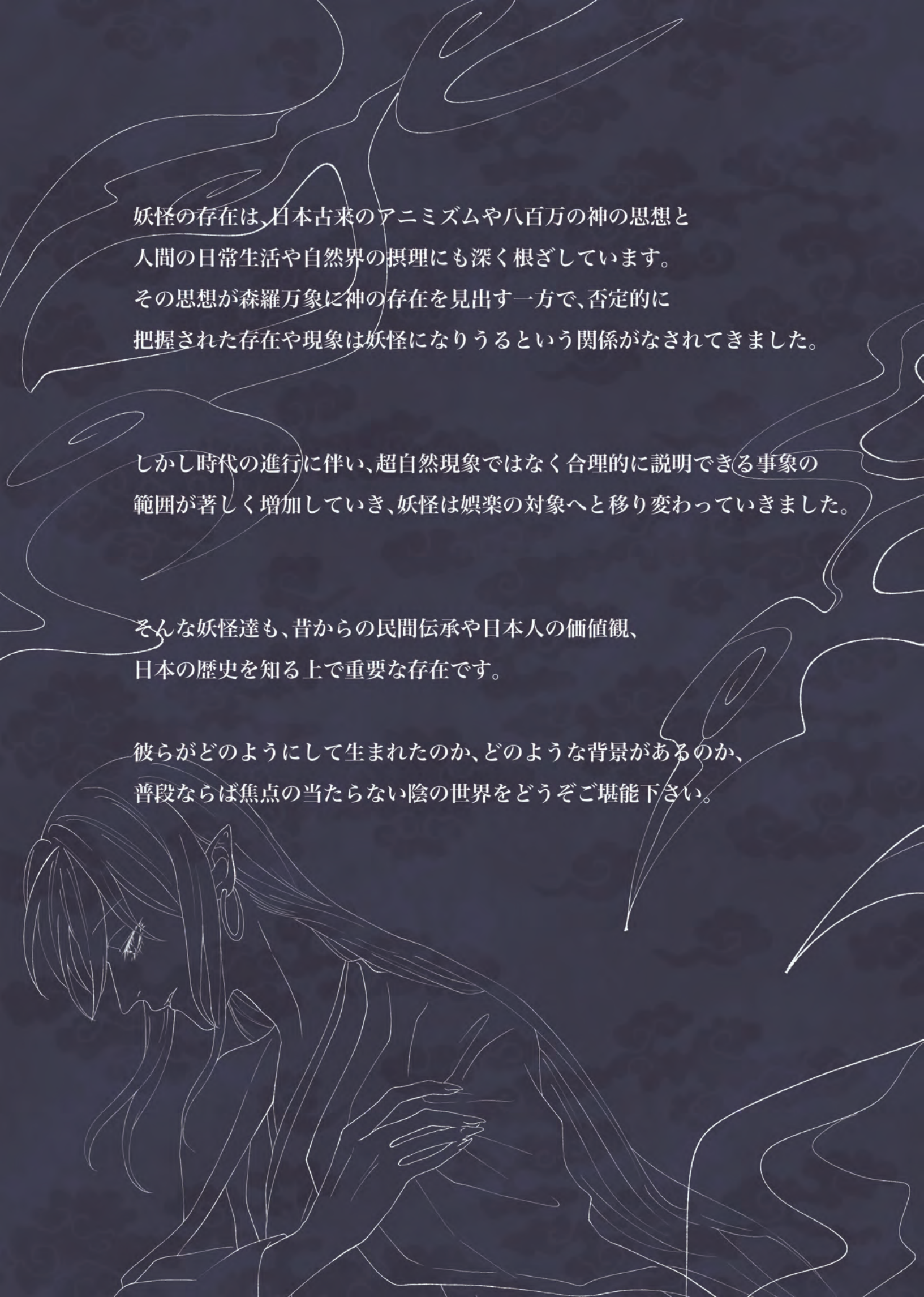


# 美鬼夜行







妖怪の存在は、日本古来のアニミズムや八百万の神の思想と人間の日常生活や自然界の摂理にも深く根ざしています。その思想が森羅万象に神の存在を見出す一方で、否定的に把握された存在や現象は妖怪になりうるという関係がなされてきました。

しかし時代の進行に伴い、超自然現象ではなく合理的に説明できる事象の範囲が著しく増加していき、妖怪は娯楽の対象へと移り変わっていきました。

そんな妖怪達も、昔からの民間伝承や日本人の価値観、日本の歴史を知る上で重要な存在です。

彼らがどのようにして生まれたのか、どのような背景があるのか、普段ならば焦点の当たらない陰の世界をどうぞご堪能下さい。





# 女郎蜘蛛

じょろうぐも

女郎蜘蛛は、日本各地に伝わる妖怪の一種。別表記の「絡新婦」は漢名を当てた熟字訓である。

女性と見間違えるほどの美貌をもつ美男。常にその表情は憂いを帯びている。過去のとある出来事から若干人間不信気味。普段は滝壺の奥で引きこもっている。



# 伝記

静岡県伊豆市の浄蓮の滝では、滝の主として女郎蜘蛛の伝説がある。

ある男が滝壺のそばで休んでいると、無数の糸が脚に絡みついてきた。

男がその糸を近くの木の切り株に結び付けてみると、株はメリメリと滝に引き込まれた。

女郎蜘蛛が男を滝に引き込もうとしていたのである。以来、里の人々は女郎蜘蛛を恐れてその滝に近づかなかったが、

よその土地から来た木こりが事情を知らずに木を刈っていたところ、誤って愛用の斧を滝壺に落としてしまった。

木こりが斧を取り戻すために滝壺に潜ると、美しい女が現れて斧を返してくれ「ここで見たことを誰にも話してはいけません」と言った。

木こりは以来、言いつけを守りながらも胸に何かがつかえたような日々を送り、ある宴の席で、酒の勢いで一部始終を話してしまった。胸のつかえがとれた安心感で木こりは眠りこけたが、そのまま二度と目を覚ますことはなかったという。

別説では、話し終えた木こりがまるで見えない糸に引かれるかのように外へ出て行き、翌日には浄蓮の滝の滝壺に死体となって浮かんでいたという。



アテシはただ静かに暮らしたかっただけなのにねえ……  
それなのに人間はやたらめったらそこらの木に斧を打ち込んでくから脅かしてやったんだ。  
忠告だってしたさ、「口外するな」とね。だのに喋っちまうから……  
そんなやつを生かしておく義理はないだろ？

## コボッチから見た女郎蜘蛛

女郎さん？  
物静かでいい人だよ！とても綺麗だし！  
でも、あまり他人と関わるのは好きじゃないみたい。  
あと、怒るとすごいわいから！  
この前殺されかけたもん、大変だったなあ。







かわざる  
川猿

柳田國男編纂の「山島民譚集」にある妖怪。  
その名の通り、川辺に住む妖怪である。

どこか野性味のある美丈夫。  
性格は見目に反して荒々しく凶暴。  
自慢の身体能力と鋭い爪で魚などの  
獲物を捕らえることを得意とする。



# 伝記

柳田國男によって編纂された「山島民譚集」において、遠州（静岡県）榛原郡で収集された妖怪名で、名前に猿とつくが、魚のように生臭い河童やかわうのようなものであるという。子供の姿に化けて人を化かし、人に危害を加えられると報復として皮膚や肉をかきむしってきて大けがを負わせてくる。

また馬は川猿に遭っただけで倒れて死んでしまうといわれ、馬を飼う者たちからは疫神として恐れられた。このことから、馬の守り神とされる山猿という妖怪がいるが、それとは正反対の存在であると考えられる。

基本的には臆病だが、助けてくれた人の顔は忘れないともされる。



……ああ？  
なんだよ、そこでノびてる人間が  
気になんのか？  
言っておくが、俺はただ自分が  
生きるためにそいつを殺したんだぜ。  
誰だって死にたかねえだろ？  
俺を殺そうとしたんだから  
当然の報いだ。  
そのかわりと言っちゃあなんだが、  
俺は助けてくれた奴の顔は一生  
忘れねえ夕子でもあるぜ。

## 女郎蜘蛛から見た川猿

ああ、あのガキンチョかい。  
喧嘩っ早いところは欠点だけどね、義理堅いところは良いんじゃないか。  
腕もたつし、頭も悪くない。  
……ただねえ、その匂いは何とかならないかい？







しゅつせぼら  
出世螺

出世螺は、江戸時代の奇談集『絵本百物語』にある日本の妖怪。ホラガイが数千年を経て龍となったものとされる。

内気で陰湿な性格の青年。海と山を挟んだ洞窟の中を根城としており、滅多に人前には出てこない。どちらかというとも魚に近い種族らしく、乾燥は大敵。夏には余計に引きこもる。



# 伝記

深い山に住むホラガイが山に三千年、里に三千年、海に三千年住んだ末に龍に化身したものであり、山からこの出世螺が抜けた跡を「出世のほら」と呼び、静岡県湖西市の遠州今切れの渡しも法螺の抜けた跡とされている。

また、螺の肉を食べると長生きをするといわれるが、実際にはそのようにして長生きした人の話は確認されていないため、これが由来となって嘘をつくことを、「ほらをふく」と言うようになったともいう。

ホラガイが龍に化身して山から抜け出すという話は、ほかの古典の文献や民間伝承にもある。

『東京近郊名所図会』によると、明治5年8月25日午後に激しい雷雨があり、道灌山(現・荒川区西日暮里)の北川の崖が崩壊して穴跡ができ、山に千年住んだ法螺が抜けて昇天した跡だと評判になったという。この抜けた穴は明治末期まで残っており、付近にはほかにも抜け穴が多く、地面が急に陥没することもあったという。

しかしこの日暮里近辺の怪異の正体は、彰義隊が残した火薬、弾丸、地雷などの自然発火や、彼らが隠れ家として掘ってあった大穴の陥没といった現象がホラガイによるものと見なされたとの説もある。



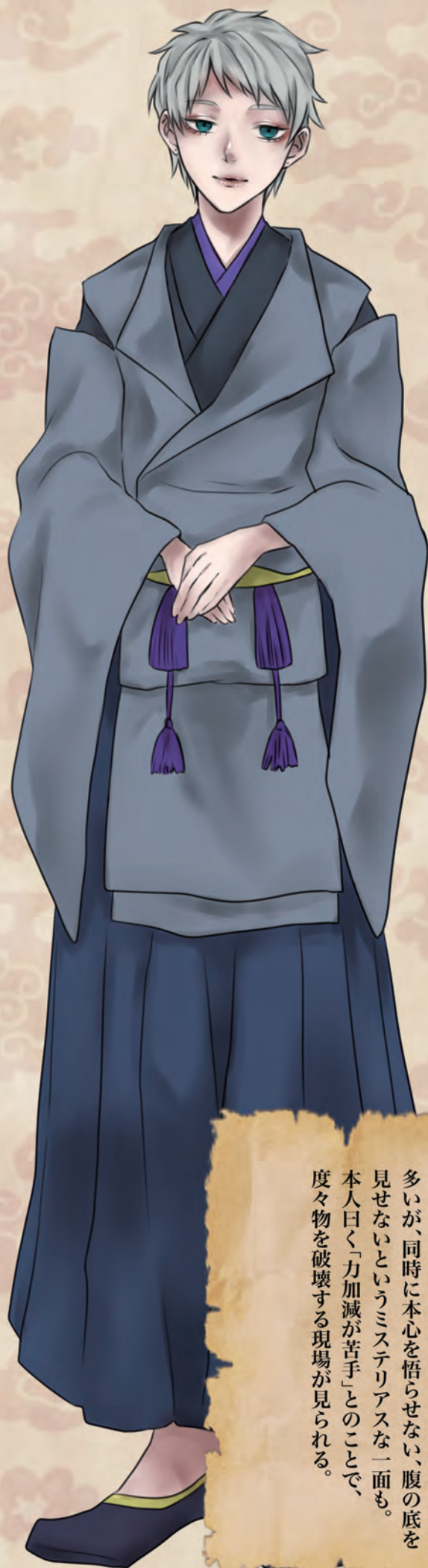
外界はいいところだって聞いてたけど、全然そんなことなかったよ……  
僕の住処だった所は何故か人が集まるし、僕の肉を食べれば長生き出来るとかいう根拠の無い噂は広まるし、その事から「ほらふき」なんて僕にとって不名誉な言葉も作られるし……  
はあ……  
やっぱり引きこもるしかないかあ……

## 川猿から見た出世螺

うじうじしてて気弱で癪に障る引きこもり。そんぐらいだろ。噂ばかりが独り歩きしてるけどな、ヤツ自身はそんなでもねえよ。ずっと陰気臭い顔しててむかつくったらありやしねえ。







# 石妖

せきよう

石妖は、佐藤成裕による江戸時代の随筆『中陵漫録』巻13にある妖怪。

物腰が柔らかく、物静かな青年。誰に対しても礼儀正しく丁寧に接し、気配りもできるなどにかく有能。まるで母親のような優しさに惹かれる者も多いが、同時に本心を悟らせない、腹の底を見せないというミステリアスな一面も。本人曰く「力加減が苦手」とのこと、度々物を破壊する現場が見られる。



# 伝記

豆洲(現・静岡県)の山中での石切り場でのこと。  
昼時になったので、石を切り出していた石工たちはみな休息をとっていた。

すると1人の女性が現れ、

「毎日のお仕事でお疲れでしょう、私が按摩をして差し上げましょう」といって1人の石工の肩を揉んだ。

すると石工は按摩がとても気持ちよかったと見え、そのまま寝入ってしまった。

女性はさらに別の石工を按摩すると、その石工も寝入り、たちまち数人も石工が寝入ってしまった。

残る石工はあと1人となったが、彼はその女を只者ではない、妖怪に違いないと見て、密かにその場を立ち去った。

ちやうど狐師に出会ったので事情を話したところ、その狐師もやはり、その女性は狐狸の類に違いないと言った。

2人が元の石切り場に戻ると、女性は2人を見て逃げ出そうとした。狐師が銃で女性を撃つと、女性の姿は消え、その跡には

砕け散った石だけが残されていた。

眠っている石工たちの背骨のところには石で引つ掻いたような傷ができており、病気になる危険性もあったが、家に帰ってから薬で手当てをしてどうにか助かった。

あの女性は石の気が化したものだろうといわれたが、その後もその女性はたびたび現われたという。



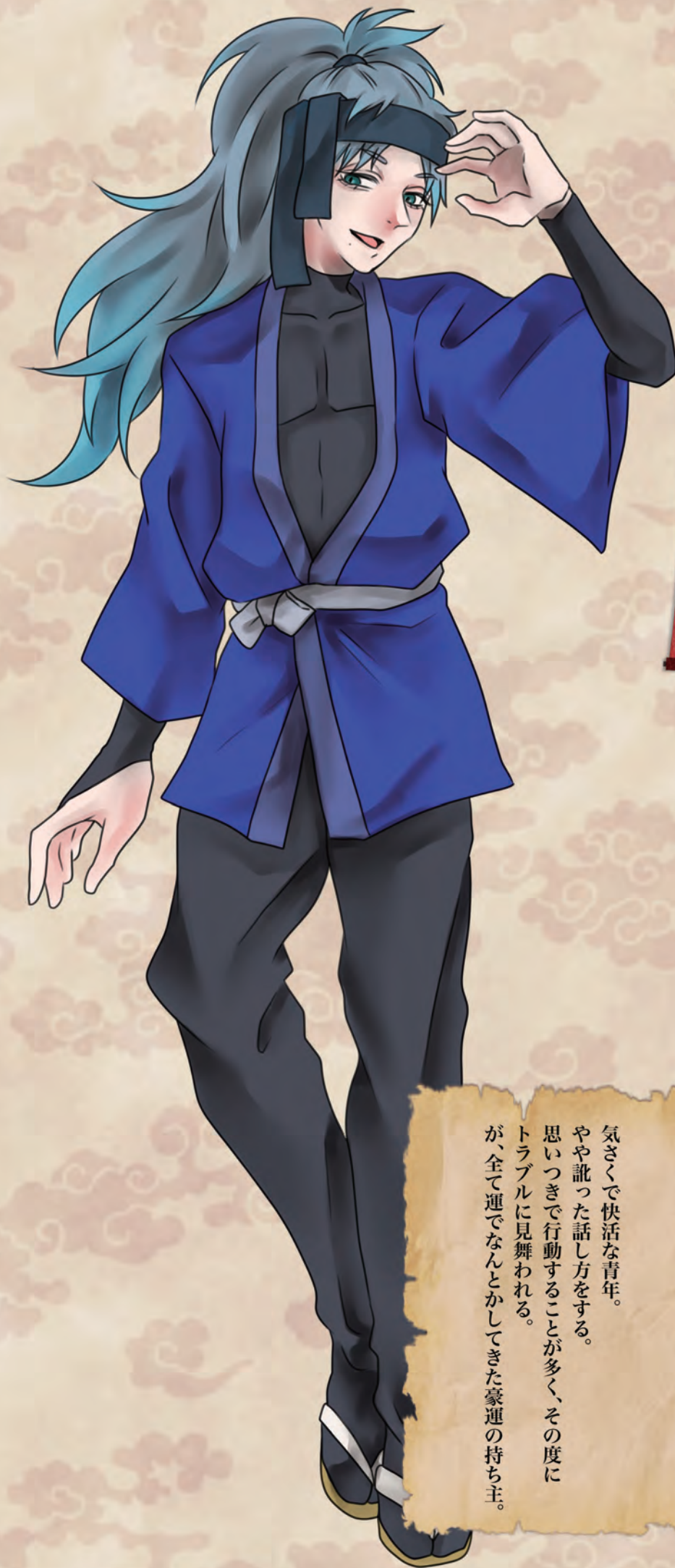
ふふ、お疲れですか？  
でしたら僕が肩でも揉みましようか？  
あら、遠慮なさらずに……  
……それでもなお断るということは、  
僕の話をご存知のようで。  
あの人達に何をするつもりだったか……  
ですか。  
それを聞いてどうなさるおつもりですか？

## 出世螺から見た石妖

石妖さん、か……優しくていい人だと思うよ。  
ただ、時々なんだけど、目の奥が笑ってないっていうか……  
なんだか言いようのない怖さが垣間見えるっていうか……  
や、やっぱりなんでもない、です……







なみこぞう  
波小僧

波小僧は、遠江国（静岡県西部）一带に伝わる妖怪。  
遠州七不思議の一つに数えられる。  
浪小僧と表記される場合もある（読みは同じ）。

気さくで快活な青年。  
やや訛った話し方をする。  
思いつきで行動することが多く、その度にトラブルに見舞われる。  
が、全て運でなんとかしてきた豪運の持ち主。



# 伝記

少年が田植えをしていると、親指大の波小僧が顔を出した。波小僧は大雨の日に海から陸に上がって遊んでいたが日照り続きで海へ帰れなくなったと言い、気の毒に思った少年は波小僧を海へ帰してやる。その後も日照りのため不作が続き、少年が途方に暮れて海辺に立っていると波小僧が現れる。波小僧は少年に恩返しをしないと、雨乞いの名人である父親に頼んで雨を降らせると約束する。そして、波の響きが南東から聞こえれば雨が降る合図だと言いつつ海に向こうへ帰って行き、それから間もなく南東から波が響いて雨が降り田畑が潤った。その後、農民は波小僧の知らせで事前に天気を知ることが出来るようになった。

妖怪漫画家・水木しげるの著書の中には、浪小僧を神様に近い河童と解説しているものもある。また、民話では海坊主ともされる。民俗学者・千葉徳爾による論文「田仕事と河童」では、天竜川中流の山間部に、河童が農作業を手伝ったという伝承や昔話が多いことが報告されているが、波小僧もまた天竜川一帯の伝承として、それらにあてはまるとの見方もある。

うーみーはひろいーなー、  
おおきーいなー……つと。  
いやあ、海はええとこやんねえ。  
でっかくて、綺麗で、まさしく  
自然の恵み、やね！  
……ああそうそう！そろそろ  
雨降るから、洗濯物はしまっときい。  
なんで分かるかって？  
そら、オラの父ちゃんが雨降らしてん  
やからな！それを知らせるのが  
オラの仕事やんね！

## 石妖から見た波小僧

おおらかで良い人ですよ。  
海のように、大抵の物事は笑って流してしまうような方です。  
ただちょっと、何を言っているのか聞き取れないことも  
あるんですけど。







しろぼうず  
白坊主

白坊主は、日本各地に伝わる妖怪の一つ。一般には白い坊主姿の妖怪とされるが、地方によって様々な伝承がある。

白く美しい長髪と穏やかな笑みが特徴的な男性。よく通る声を持ち、山の頂上から麓まで聞こえるという。人を驚かせるのが好きというお茶目な一面ももつ。



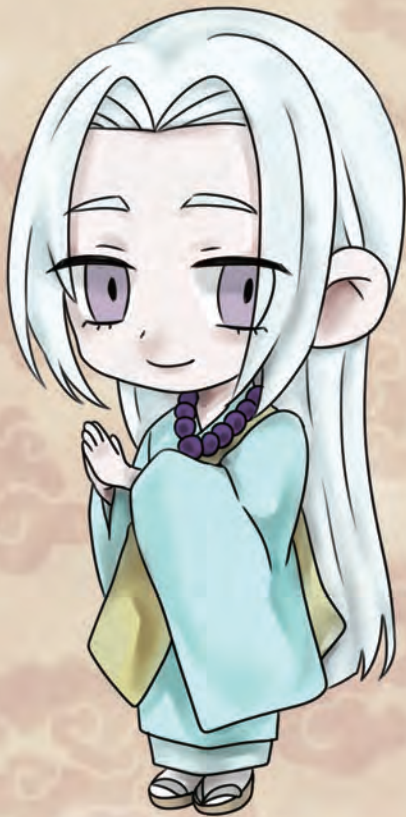
# 伝記

静岡県富士郡芝富村長貫(現・富士宮市)では、その昔、どんどん焼きをしていると毎年のように、白鳥山から白坊主が「ほーい、ほーい」と呼ぶため、気味悪くなつてこの行事をとりやめたという。

その他にも、どんど焼きをすると白鳥山から白髭の白坊主が出てきて子供をさらう、どんど焼きをしたら対岸の白鳥山から白鳥が多く飛来し銚を散らしたせいで伝染病が部落中に発生して大騒ぎになった、白鳥山の南にある大鏡山からも白坊主が現れ、この白坊主を見た者には災難が訪れるなどともいわれる。

以前、戦国時代のこの地には狼煙台があり、どんどん焼きは狼煙と見誤るために制限または禁止されたという説もあることから、白坊主とはこの狼煙台の守備兵を指しているとの解釈もある。

古典の妖怪絵巻のうち、百鬼夜行絵巻に類する『百鬼ノ図』(国際日本文化研究センター蔵)に、白い布から四肢が生えて歩くような、もしくは四肢を持つ動物が白い布をかぶっているような妖怪が描かれており、これが「白坊主」と呼ばれることがある。



おやおや、このような山奥にお客さんとは珍しい。何も無いところですが、どうぞごゆるりと

……私ですか？

私はただのしがな僧ですよ。

昔からここで任された仕事があるものでして。

ええ、ええ、それはもう昔から……

## 波小僧から見た白坊主

白坊主さんかあ！えらい別嬪さんな坊さんやね！  
真面目でしっかりしとるけど、おちゃめなところもあって可愛らしいな。  
なあなあ、次はオラも悪戯に混ぜてくんろ！







このはてんぐ  
木の葉天狗

木の葉天狗は、江戸時代の随筆や怪談など各種文献に多く名が見られる天狗の一種。境島(さかいどり)とも呼ばれる。

生真面目で勤勉な青年。

木の葉天狗は天狗の中でも位が低いことが理由なのか、他の天狗の使いつ走りになることもある。

しかし他の天狗と同様に神通力を持つのであまりからかうのは禁物である。



# 伝記

松浦静山の随筆『甲子夜話』巻七十三の6項には、静山の下僕、源左衛門が7歳の頃に天狗にさらわれたとされる天狗界での体験談が述べられており、その中に木の葉天狗の名がある。それによれば、天狗界では木の葉天狗は白狼とも呼ばれており、老いた狼が天狗になったものとされ、山で作った薪を売ったり、登山者の荷物を背負ったりして、他の天狗たちが物を買うための資金を稼いでおり、天狗の中でもその地位はかなり低いという。

また、静岡県伊豆の国市には天狗伝説の残る国清寺がある。1363年、室町幕府の有力者・畠山国清が創建したとされ、1368年関東管領の上杉憲顕が本格的な寺として修築した寺。最盛期には子院78、末寺300を擁する壮大な伽藍となり、室町幕府3代將軍足利義満の時には関東十刹に加えられた。仏殿には、鎌倉時代慶派の作による釈迦如来像が安置され、境内には、開基・開山の墓や、旧楓林庵の子育て地藏などが残されている。

この寺を舞台とした天狗にまつわる伝説が3つも伝えられていて、「天狗にさらわれた一兆さん」は特に著名。

一兆和尚は実在の人物で、後に塔頭の高岩院住職となった。また、今でも建長汁と共に、修行僧が食べている国清汁はこの寺が発祥の地。



おい人間！そこをどけ！  
その魚は我らが大将、大天狗様に  
捧げるための魚であるぞ、人間如きが  
触れて良いものではない！

ふむ、分かれば良いのだ。分かれば  
であれば、ここから即刻立ち去れ。  
貴様自身が供物になりたいのであれば  
構わんがな。

## 白坊主から見た木の葉天狗

ああ、いつも忙しそうに駆け回っておりますね。  
ただ、お仕事も大事ではありますが、きちんとお休みくださいね？  
何事も体が資本ですから。







# 雷獣

らいじゅう

雷獣とは、落雷とともに現れるといわれる日本の妖怪。  
一説には『平家物語』において源頼政に退治された妖怪・鶴は実は雷獣であるともいわれる。

大きな体躯と尊大な態度が目立つ男。  
プライドが高く自分の意見は曲げない。  
雷を操る力を持っており、気が立っている時は彼の周囲でよく落雷が見られるという。



# 伝記

明治時代に近代化が進んで以来、雷獣は河童や人魚といった妖怪・幻獣に比べると知名度が低下したものの、江戸時代には雷獣の知名度は非常に高かった。

航空技術のない当時の人々にとって、空とはまったくの未知の世界であり、空の上がどうなっているかはあれこれと想像を巡らせるしかなかったため、空の上にはまだ知られていない生物が住み、それが落雷などの天変地異によって地上に落下するものと考えられ、雷獣の伝承が生まれたといわれている。

松浦静山の随筆『甲子夜話』によれば、雷獣が大きな火の塊とともに落ち、近くにいた者が捕らえようとしたところ、頬をかきむしられ、雷獣の毒気に当てられて寝込んだという。また同書には、出羽国秋田で雷と共に降りた雷獣を、ある者が捕らえて煮て食べたという話もある。

新潟県三島郡の西生寺の宝物館には、寺宝として伝わる雷獣のミイラがあり、一般公開されている。その由来や伝承は不明だが、体長35センチメートルほどのネコのような姿で、大きく牙をむきだして威嚇するような姿勢をとっている。妖怪研究者・多田克己はこのミイラを見て「ネコそのものだった」と語っている。

日本には人魚や鬼のものとされるミイラが多数あるが、雷獣のミイラの例は珍しい。静岡県でも、ある旧家の蔵から「雷獣」と墨書された和紙に包まれたミイラが発見されており、やはり由来は判明していない。



体長は2尺前後、鋭い爪を持ち、落雷と共に現れる……それが雷獣だ。昔はそれなりに名の知れたものであったがな、今では隠居したようなものだ。

……いずれは落ちぶれ、忘れられていくものだと分かっているが、人というのは、あまりに軽薄であるな。

## 木の葉天狗から見た雷獣

雷獣殿であるか。  
あの方の名は我々のところでも広く知れ渡っている。  
堂々と気品にも溢れておいでで、大天狗様の他で尊敬出来るお方だ。







ろうじんび  
老人火

老人火または老人の火は、江戸時代の奇談集『絵本百物語』にある怪火。老人とともに現れるという。

瘦身に華奢な体躯の男。肌も髪も白く、みすぼらしい着物を着ており、口数が少なく謎の多い人物。常に目を閉じているが、見えていない訳ではないらしい。



# 伝記

信州(現・長野県)と遠州(現・静岡県)の境で、雨の夜に山奥で現れる魔の火。

老人とともに現れ、水をかけても消えないが、獣の皮ではたくと消えるという。

一本道で老人火に行き遭ったときなどは、履物を頭の上のせれば火は脇道にそれて行くが、これを見て慌てて逃げようとする、どこまでもついてくるといふ。

別名を天狗の御燈(てんぐのみあかし)ともいうが、これは天狗が灯す鬼火との意味である。

江戸後期の国学者・平田篤胤は、天狗攫いから帰還したという少年・寅吉の協力で執筆した『仙境異聞』において、天狗は魚や鳥を食べるが獣は食べないと述べている。

また随筆『秉穂録』によれば、ある者が山中で肉を焼いているところへ、身長7尺(2メートル以上)の大山伏が現れたが、肉を焼く生臭さを嫌って姿を消したとある。

この大山伏を天狗と見て、これら『仙境異聞』『秉穂録』で天狗が獣や肉を嫌うという性質が、老人火が獣の皮で消せるという説に関連しているとの指摘もある。



もし、旅の方。  
これから信州へ？それとも遠州の方で  
ございましょうか。  
このような山奥に来るのは峠を  
こえる者ぐらいしかおりませんので。  
先を急ぐのであればお氣をつけて……  
じきに雨が振ります。  
火にはお氣をつけなされ……

## 雷獣から見た老人火

老人火……前に一度山奥で会ったな。  
表情も感情も読み取れず、よく分からん奴だった。  
しかし、悪い奴でも無さそうだったな。







# コボツチ

磐田郡ではクダギツネとも呼ばれ、谷間やグミの林に棲むイタチに似た妖怪とされる。名称は「小法師(こぼうし)」が訛ったものという説がある。

幼く可愛らしい容姿をした妖怪。明るくイタズラ好きな性格で、容姿通り子どもっぽさが目立つ。しかし、手グセが悪く他人から物を盗んだり、大食らいのため穀粒と言われてしまう一面も。本人に一切の悪気は無いらしい。



# 伝記

別名を管狐といい、日本の伝承上における憑き物の一種である。長野県をはじめとする中部地方に伝わっており、東海地方、関東地方南部、東北地方などの一部にも伝承がある。

竹筒の中に入れてしまうほどの大きさ、またはマッチ箱くらいの大きさで75匹に増える動物などと、様々な伝承がある。

別名、飯綱(いづな)、飯縄権現とも言い、新潟、中部地方、東北地方の霊能者や信州の飯綱使い(いづなつかい)などが持つていて、通力を具え、占術などに使用される。

飯綱使いは、飯綱を操作して、予言など善なる宗教活動を行うのと同時に、依頼者の憎むべき人間に飯綱を飛ばして憑け、病気にさせるなどの悪なる活動をする信じられている。

狐憑きの一種として語られることもあり、地方によって

管狐を有するとされる家は「くだもち」「クダ屋」「クダ使い」

「くだしよう」と呼ばれて忌み嫌われた。

管狐は主人の意思に応じて他家から品物を調達するため、

管狐を飼う家は次第に裕福になるといわれるが、初めのうちは

家が裕福になるものの、管狐は75匹にも増えるので、やがては

食いつぶされて家が衰えるともいわれている。



よいしょ、よいしょ……  
ふう、これだけ持つてくればご主人も満足するよね！  
あ、ちよつと、これは泥棒なんかじゃないっつら。僕はただご主人の命令に従っただけだよ！  
ま、もちろん報酬は貰うけどね？  
タダ働きなんてヤダヤダ！  
いっぱいご褒美貰わなきゃ！

老人火から見たコボッチ

いつも元気で、羨ましい限りでございます。  
ただ私、獣は不得手でありまして……  
ええ、悪い方ではありませんが……





# 妖怪分布表

石妖  
(静岡の山中)



老人火  
(長野と静岡の境)



川猿  
(榛原郡)



白坊主  
(富士宮市)



波小僧  
(浜松市)



出世螺  
(湖西市)



雷獸  
(藤枝市)



女郎蜘蛛  
(伊豆市浄蓮の滝)



コボッチ  
(磐田郡)



木の葉天狗  
(大井川)





# あとがき



古来の妖怪というものはかつては「鬼」と呼ばれ、疫病や厄災といったものは全て鬼の仕業だと考えられていました。

方位にある「鬼門」の由来もその鬼からきているといい、現代に伝わる鬼が牛の角を持ち虎の毛皮を纏っているのも、鬼門が丑寅(北東)の方角であるからだとされています。

これらは気になってちょっと調べれば分かるようなものですが、興味を持たなければ調べる機会もないでしょう。調べてみると、意外と馴染みのある文化や歴史に関連したものが多いのです。

平安時代から日本中を駆け巡った妖怪達は、今では能や歌舞伎のような舞台からアニメや漫画といったサブカルチャーまで幅広く取り入れられてきました。

そんな妖怪達は、非常に魅力的で面白い知識をもたらせてくれます。

少しでも妖怪に、歴史に興味を持ってもらえたら、そのような思いでこの作品を作りました。今回は静岡に焦点を当てて制作しましたが、妖怪は山のように多く存在します。

この作品があなたにとって、妖怪の世界への入り口となれば幸いです。